

Title	Vala or the Four Zoas : Blake における思想的変遷
Author(s)	小林, 恵子
Citation	Osaka Literary Review. 14 P.14-P.26
Issue Date	1975-12-15
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25671
DOI	10.18910/25671
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Vala or the Four Zoas

— Blakeにおける思想的変遷

小 林 恵 子

I

Vala or the Four Zoas は、いわゆる“Lambeth Seven Books”⁽¹⁾と呼ばれる1793年から1795年までに書かれた小予言書群をまとめて、壮大な一つの体系に作り上げようという意図の下に書き始められたものである。それは、小予言書のいくつかのタイトルが示すように、当時の社会に起きた諸革命を契機にして、彼の social vision を確認し、定着するということであったろう。先に Blake は、革新的出版者 Joseph Johnson を中心として Joseph Priestley, William Godwin, Mary Wollstonecraft, Thomas Paine など当時の急進的自由思想家達と交わり、大いに時勢を論じ合っていた。言い伝えによれば、1780年公教徒救済法案に触発された大暴動には、赤帽をかぶり自ら先頭に立って、ニューゲイトの刑務所を焼いたというほど活動的であった。彼らとの交わりは長く続いたのであろう。1792年に *Rights of Man* を出版した T. Paine が逮捕されそうになった時、フランスに逃れるようにという Blake の忠告によって、彼は危く一命をとりとめているからである。⁽²⁾

ところが、1800年に至って、Blake が生まれて始めて London を離れ、Sussex 州 Felpham に居を移した時、親友 Thomas Butts は彼に思想的偏見を警告する親身な手紙を書いた。「生活の方法手段を変えることによって、あなたはもっとよい人になるだろうことを予言いたします。…読書から摂取され甘やかしによって助長され限られた語り合いによって釘づ

けにされたある考え方、そしてそれは今迄あなたの利益と幸福とに等しく不利だったのですが、それは今や必ず夜明けの霧の如く散ってしまうでしょう。そして今後のあなたは共同社会の一員となるでしょう。⁽³⁾これに答えて Blake は、次の様な返事を書いている。

I also thank you for your reprehension of follies by me foster'd. Your prediction will, I hope, be fulfilled in me, & in future I am the determined advocate of Religion & Humility, the two bands of Society.⁽⁴⁾

つまり、この頃すでに Blake は、自分のとってきた行動を愚行と考え、誤ちとして少なからず認めているのである。このあたりの事情について、寿岳文章氏は明解に「仏革命前後に Johnson 書店で Blake が知りあったほどの人々は、いずれ劣らぬ理神論的傾向の持主であった。誤りの多い旧制度を打破しようとするこれらの革命家達の持つ実行的な熱情、権威に屈することなくつねに所信を貫こうとする彼らの勇氣、それを Blake は深く愛したが、しかし詩靈の予言者と理神論者とは結局袂をわかたねばならなかった。⁽⁵⁾」と述べている。つまり外的な自由だけを力説してかえって精神的な自由には理性の重圧を加えている彼らの主張に対して Blake は次第に反撥を感じ、詩靈の新しい予言者として、使命を自覚し始めたというのである。この急進的で現世的な情熱から手紙の中に見られる宗教と謙遜へ向う心の変化は、革命後の恐怖政治への進展、ナポレオンの抬頭という社会現象とも無縁ではあるまい。John Beer は、次の様な興味深い指摘をしている。

This change in the economy of Blake's beliefs had also been influenced by the changing pattern of events in Europe. The self-contradiction involved in the suppression of liberties in Switzerland and the advent of Napoleon shook the loyalties of staunch supporters of the French Revolution who had been able to explain the earlier violence as necessary in the cause of liberty.⁽⁶⁾

そして、この頃から Blake は、彼自身の目に写る人生の諸相を神話とし

て作品の中に歌いこむようになる。彼の人生観のこの変化が、丁度軌を一にして1795年から1804年の間書き続けられ、何回も手を入れられた *Vala or the Four Zoas* の草稿に微妙に反映されている。草稿というのは、Blake は結局これをまとめることができず、彫版しなかったからである。

II

Blake の小予言書の思想の中心は、Reason と Energy の対立概念である。この対立が進歩を生み出すものと考えた Blake は、現実界を支配している Reason を Urizen の属性とし、その反動としての Energy を Orc の属性とした。さらに地理的に、前者を旧大陸の権化とし、後者を新大陸の象徴とした。つまり人間の精神的機能と歴史的社会的象徴とを同一視して考えたのである。 *A Song of Liberty* の中で “In her (= the Eternal Female) trembling hands, she took the new born terror, howling.”⁽⁷⁾ と歌った時、この new born terror Orc は Blake にとって、政治的にも精神的にも新しい自由の体現者として、希望を表わすものであった。

しかし、*Vala or the Four Zoas* を書くにあたって彼は、以前の Urizen — Orc という二元的対立よりはるかに複雑な四つの Zoa と呼ばれる生き物を想定し、Tharmas, Urthona (= Los), Luvah (= Orc), Urizen と名づけた。この四つの Zoa 達が合一して一個の巨人 Albion が完成するのである。彼らはもともと統一体であったが、ある愛憎が原因で分裂の様相に陥り、現今の無秩序をひきおこしているのである。Blake はこの原因を究明し、それに解決を与えることにより、再びもとの世界をとりもどすという主題を設定し、冒頭で高らかに歌った。

Daughter of Beulah, Sing

His fall into Division & his Resurrection to Unity:

His fall into the Generation of decay & death, & his

Regeneration by the Resurrection from the dead.

(Night I, ll. 20-23)

そして Young の *Night Thoughts* に示唆されて、副題には *a Dream of Nine Nights* とつけ、「夢」の形で物語を展開していく構想を立てた。しかも、この四つの Zoa 達は、それぞれ女性的分身 (Emanation と呼ばれる) として Enion, Enitharmon, Vala, Ahania を持ち、さらに男性的分身 (Spectre と呼ばれる) を持つのである。ちなみに Urthona の Spectre が Los であり、Luvah の Spectre が Orc である。この Emanation と Spectre は各 Zoa における emotion と logic に対応するものである。たとえば Tharmas の Spectre は Emanation Enion に向かつて次の様に言う。

“If thou hast sinn’d & art polluted, know that I am pure

“And unpolluted, & will bring to rigid strict account

“All thy past deeds; hear what I tell thee! mark it well! remember!

“This world is Thine in which thou dwellest; that within thy soul,

“That dark & dismal infinite where Thought roams up & down,

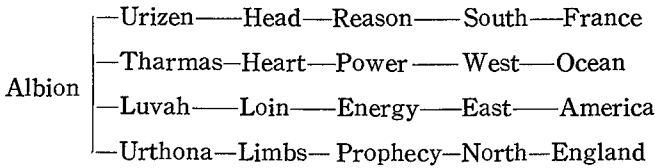
“Is Mine, & there thou goest when with one Sting of my tongue

“Envenom’d thou roll’st inwards to the place whence I emerg’d.”

(Night I, ll. 151-157)

Zoa の完全体を a Male & Female と呼ぶ時、Spectre は、Female を欠いた思想の領域のみに生きる男性的毒素と考えられている。

さて以前の二元的対立に比べて、この四つの対立、さらに八つの分身はとりもなおさず世界の複雑化を示すものであり、世界の悲惨を全体的に Albion の悲劇として考慮するという Blake 思想の発展、深刻化をうかがわせるものである。というのは小予言書同様、ここでも精神的機能と歴史的社会的事象が同一視され、統一体としての Albion は、universal man であるとともに全宇宙を象徴するからである。それらを簡単に図示してみよう。



Blake には、macrocosm と microcosm を同一視する神秘的傾向があり、宇宙は大きな個人であると共に、個人は小さな宇宙である。Prophecy を付与された Urthona の目を通して、宇宙は極大と共に極小の姿を見せる。

His eyes, the lights of his large soul, contract or else expand:
Contracted they beheld the secrets of the infinite mountains,
The veins of gold & silver & the hidden things of Vala,
Whatever grows from its pure bud or breathes of fragrant soul:
Expanded they beheld the terrors of the Sun & Moon,
The Elemental Planets & the orbs of eccentric fire.

(Night V, ll. 121-126)

上に掲げた図式は、社会的な問題を人間の諸機能によって考えている点で Plato に非常によく似ている。彼は『国家』において、頭、胸、腹をそれぞれ理性（統治者）、意志（軍人）、欲望（農民・職人）とし、その調和体としての理想国家を正義の実現と考⁽⁸⁾えた。この idea の世界と Albion の宇宙と比べてみる時、この構図は少なからず Plato に負っていると考えられる。

III

宇宙の全体的惨事を生み出した Zoa 達の分裂、腐敗にいたる経過は、第一夜から第六夜までくりひろげられる。そこでは Emanation の分離によって Zoa が Spectre に化すという過程と、Spectre と化した Zoa 達が互いに自分の自我を主張する主権争いの二つが並行して述べられていて、複雑な形で Albion が致命的死滅に至るのを知ることができる。Zoa にお

ける Emanation の分離において、彼は Zoa 間の血縁を明らかにしている。まず “Parent Power” Tharmas が自分の息子 Urthona の Emanation Enitharmon に同情したため、彼の Emanation Enion が嫉妬して分離するという愛憎の葛藤から墮落が始まる。Enion は失われた愛を嘆きつつ、自分の胸から糸をつむぎ出して九日九夜かけて幕屋をつくり出す。これが Blake 神話における陸と海の分離であり、“Circle of Destiny” の出現である。これは空間を与えられて “Ulro” と呼ばれる。この空間で母親 Enion の手をのがれて成長していくのが Los と Enitharmon である。Los はいまだ「時間」をコントロールすることができ、Enitharmon は「空間」をコントロールすることができるが、二人の婚礼の酒盛りで Enitharmon の腰から Luvah と Vala が生まれるにあたって、二人は完全に分離する。Luvah は Energy の象徴、怒りの体現であり、Vala は爆発的に繁茂する Nature の象徴である。二人の間に生まれた子供が、Urizen, Ahania であり、Vala は maternal love に酔いしれて、自分の夫の存在を忘れる。Luvah はそのため、苦しみの妒で焼かれ、不滅の死に運命づけられる。

“... we all go to Eternal Death,
“To our Primeval Chaos in fortuitous concourse of incoherent
“Discordant principles of Love & Hate.”

(Night II, ll. 101-103)

Luvahの死に続く世代 Urizen は、何事も数学的に割り切る英知の王であり、彼の国はコンパスや定規で計られた三角、四角、丸型等の建造物が立ち並ぶ。すべてを支配する Urizen は、それにもかかわらず常に未来の不安におののいている。この世界が続かないのを予感しているからである。だから彼のEmanation Ahania が、Luvah と Vala が再び怒りを発し、“the vast form of Nature” が支配した夢を見たと言げると Urizen は、彼女を玉座から投げ出してしまふ。四つの Zoa 達が、それぞれ親子の関係を保ちつつそれぞれ Emanation の分離を生じ、全て Spectre と化し

たこの時、亀裂が生じて “the bound of Destiny” が破れて大洪水となる。“Parent Power” Tharmas の憤りであり、混沌の再生である。不滅の死という概念が明確になってからの Orc → Urizen → Tharmas という Blake のサイクルは、N. Frye によれば、初期の Urizen → Orc という進歩的構造に対して、はるかにペシミスティックな円環的歴史観を物語るものであるという⁽⁹⁾。つまり、新しい革命の存在は、不可避的に別の抑圧体制 (Urizen 的支配) へ変遷し、それはさらに崩壊混沌状態に陥ると見る歴史観である。実際に革命の時期を経てきた Blake は、その後かえって根強く浸透した “Deism”、それに伴う人間の新しい抑圧状態をつぶさに見て、今や世は混沌を呈しつつあると見たのではあるまいか。*the Four Zoas* において、描かれているのは進歩の謳歌よりも、人間がお金で労働を売り、パンをかせぐという人間の奴隷化を促進している産業革命の悲惨な有様である。Blake は英国の商業の繁栄を次の様に皮肉っている。

First Trades & Commerce, ships & armed vessels he (=Urizen)
 built laborious
To swim the deep; & on the land, children are sold to trades
Of dire necessity, still laboring day & night till all
Their life extinct they took the spectre form in dark despair;
And slaves in myriads, in ship loads, burden the hoarse sounding deep,
Rattling with clanking chains; the Universal Empire groans.
(Night VII (b), ll. 12-17)

VI

先に述べたように、Emanation の分離と並行して、Zoa 間のすさまじい主権争いが繰広げられている。第一夜で Urizen は “Now I am God from Eternity to Eternity.” と声をあげ、まず Los に自分に従えとせまる。が Los は「人はそれぞれ主人でなければならぬから、君は君のわざをすればいい、自分は自分の力をふるう。」と拒絶する。これに憤って Urizen は Luvah に Los の北の領域を略奪するようにそそのかす。

Luvah も又、「私もあなたと同等のものである。もしそんなことをしたら、あなたは私の領域をのっとってしまうだろう。」といて、もいすごい怒りを Urizen に対して発する。この二人の闘争が発端となって、Zoa 達全員が “Beulah” から “Ulro” に落ちこみ、the Eternal Man Albion は死滅寸前になっていると説かれる。この收拾として Albion は Urizen に玉座を与える。

“Take thou possession! take this Scepter! go forth in my might,
“For I am weary & must sleep in the dark sleep of Death.
“Thy brother Luvah hath smitten me, but pity thou his youth
“Tho’ thou hast not piti’d my Age, O Urizen, Prince of Light.”

(Night II, ll. 5-8)

そこで Urizen は Albion のために、“Mundane Shell” を建てる。これは “the tygers of wrath” を “the horses of instruction” によって抑えつける画一的規律的統制の確立であり、宇宙に枠組をもうけるものである。さらに “all the Human Imagination” を石化する世界的規制である。「目、耳、鼻、舌という器官が外側にまわる。」という言葉で表わされるのは、いままで「内に」見たものを「外に」見るため、眼耳鼻舌身意すべて、はっきりとした形をとらないと信用できないという理性の懐疑的精神を象徴するものである。それは Orc に限らず Los の肉体をも縛るものである。この世界の規範となるものは、春夏秋冬と人間精神に関わりなく巡る宇宙の低次の秩序である。それは運命づけられた変わることのない円環として “Starry Wheels” と呼ばれている。

一方再生した Tharmas は、この “Mundane Shell” に驚き、自分の息子 Los に別の世界 (a Universe of Death & Decay) を建てなおすよう強制する。第四夜から Urizen の世界を拘束する Los のより高次の円環 (Generation と呼ばれる) が始まるのである。

... in his (=Los) hand the thundering
Hammer of Urthona forming under his heavy hand the hours,

The days & years, in chains of iron round the limbs of Urizen
Link'd hour to hour & day to night & night to day & year to year,
In periods of pulsative furor; mills he form'd & works
Of many wheels resistless in the power of dark Urthona.

(Night IV, ll. 178-183)

Urizen の主張する自我「数学的物理的円環」から、Los の主張する自我「人間を中心とする生死の円環」へと変化するの、一つの拘束された外的革命ではなく精神的内的なレベルで最終的な「復活」へといたらせなければならないと Blake が考えたからである。外的にあらわれた革命児 Orc は、第五夜にいたって Los によって木にしばりつけられてしまう。これはすなわち、Blake 自身の興味が、Reason と Energy との対立ではなく、それは畢竟、内的なレベルでは同じものだという認識から、Reason と Prophecy の対決へと移向していると考えられるであろう。この頃から、社会を支配している規制と Blake 個人の使命としての Prophecy という対立がはっきりと表われてくる。G. E. Bentley Jr. の言葉を借りれば、この *the Four Zoas* 作製の間で、Blake は「地獄の火」⁽¹⁰⁾「悪魔達の仲間」から「日の光」「天使達との親交」へ移ったのである。

V

Los の“Generation”の世界において始めて、不滅の死に、“the Limit of Opacity” (Satan と呼ばれる) と “the Limit of Contraction” (Adam と呼ばれる) が置かれ、聖書的な version で、Los と Enitharmon との墮落神話が語られる。それは Los における肉体の死が「再生」というサイクルを準備するきっかけをつくり出すためである。この兆しは第七夜で Los にあらわれる。

“I view futurity in thee (= Enitharmon). I will bring down soft Vala
“To the embraces of this terror, & I will destroy
“That body I created; then shall we unite again in bliss;
“For till these terrors planted round the Gates of Eternal life
‘Are driven away & annihilated, we never can repass the Gates.

(Night VII (a), ll. 299-303)

Urthona の Spectre として Los がつくり出した朽ちていく人間の肉体 (Generation における創造) を破壊することによって、Los は real self Urthona となる。ここで Urthona は「我々 Zoa は全部の一部であり、自分だけでは何者でもない。四つの要素が常に調和を保って fourfold の状態で始めて Eternity の状態にもどれる」とさとり。進歩ではなく調和、釣合いこそ人間社会の要諦だと知って、Los は Urthona と合体して Enitharmon をかき抱き、自分の自我を消して、平和を説くため、自ら Zoa達のところへおもむく。彼は Urizen の軍団をこなごなに分解し、その Spectrous form をとり去ると、Urizen は敵ではなく同胞であることに気づくのである。さらに Orc をも又戦列から引き出して、個として眺めると、Los の image を帯びていることがわかるのである。この段階において、Los の役割は確かに、Last Judgment へ向かう一つの積極的な step である。

ところが第七夜には上記の解決策とずいぶん異なった (b) 版があって、(a) 版の積極的に Los が Zoa達と和解するという相対的な解決は (b) 版では彼らの活動の場“Ulro”における Zoa 間の抗争は断ち切ることができないという絶望から始まっている。Blake はこの世における平和を、絶対的な性格のものとして、Last Judgment を目指しているのだが、Los において用意された自力更生にもかかわらず、歴史は、止むことなく同じサイクルをくりかえす。この世の更生は、一時的な解決を経ても絶対的な自由を生み出すことはない。これは Blake が Los に託した Prophecy の力を考える時、現実的な意味での彼の挫折を意味するものであろう。彼の *the Four Zoas* におけるもう一つの思想的変遷⁽¹¹⁾がここにある。彼はこの作品を改訂する過程で、表題を変えているのだが、その下に次の様な聖句を書き入れたのはこの頃ではなかったろうか。

For our contention is not with the blood and the flesh, but with dominion, with authority, with the blind world rulers of this life, with the spirit of evil in things heavenly.⁽¹²⁾ (*Ephes.*, 6 chap., 12)

この世の主権者 Satan に対立して十字架にかけられる Luvah という新しい概念が導入されるのが(b)版であり、この Luvah がキリストの image となって、これ以後第九夜におけるまで、超自然的な観念が急速な勢いで形成されている。この step は Losの相対的な解決というよりキリストの復活を待ち望む宗教的な解決と言えるものである。この時 Luvah は革命の主動者としての象徴というより、死に定められ十字架にかけられ“Lord & King” と呼ばれる犠牲者として描かれている。Urizen は Luvah の衣を着た“the Lamb of God”を見て、それが“a new Luvah”であることを知り、聖書における「見て救われる」という希望的な形がとられ、Los はここではこの“the Lamb of God”を十字架から降ろし墓に運ぶ役割を果たすにすぎない。彼も又「復活」を待ち望むものである。

Thus in a living death the nameless shadow all things bound:
All mortal things made permanent that they may be put off
Time after time by the Divine Lamb who died for all,
And all in him died, & he put off all mortality.

(Night VIII, ll. 481-484)

これが新しい啓示であり、死から不滅への復活として語られるものである。この真理によって、四つの Zoa 達はそれぞれ Emanation の合体を得て、己々の持場に従って壮大な Last Judgment をくりひろげ、普遍的人間の肉体と血(キリストの聖体)をつくりあげていくことになる。そしてこの宗教的解決を経て、絶対的自由を達成した時点で、これから世を治めていくのは芸術(Blake は“Science”という言葉で「芸術」の意味で使う)であると Blake は述べ、Urthona にその使命を託すのである。

Urthona rises from the ruinous Walls
In all his ancient strength to form the golden armour of science
For intellectual War. The war of swords departed now,
The dark Religions are departed & sweet Science reigns.

(Night IX, ll. 852-855)

第七夜における(a)版と(b)版の対立において、土屋繁子氏は、「(a)の方

には物理的時間のまっとうな流れ、円環的時間に人間が乗っている流れがあるのだが、(b)の方では、ルヴァのはりつけが行なわれキリスト教的色彩が強まるとともに、物理的時間からの脱却が見られる。……キリストに行動させる時ブレイクの意識あるいはヴィジョンの中で、時間は円環的なものから線的なものにすり替ろうとする。」と示唆深い指摘をしている。Los という人間の内的レベルにおける「再生の道」へのむつかしさは、時間を離れ、この社会を離れて、絶対的なものを通して永生をつかむという方向へ向かったと言うことができよう。ここで Blake は第四夜以来 Los に託した新しい social vision “Generation” と復活の vision をうまく整合させることができなかつた。Last Judgment で再び Urthona (= Los) に使命を付与するのはこの二つの解決を実質的に整合して、この世に体現しようという Blake のこれからの生き方を示すものであろう。そうなりたいたいと願う「永生」の夢を現実にはひきおろす作業である。

the Four Zoas は、様々な挫折を身をもって体験した一番苦しい時期の Blake の所産である。社会的変動期に身をさらし、精神の独立のためについて仲間と離れ、自己の主張を守ろうとするが、それもさまざまな個人的不和を伴うという袋小路で、Blake は思想的に大きな変遷を遂げる。それは *the Four Zoas* を読み進んでいく我々の目には飛躍的な成長と見えるものである。新しい歴史観、詩霊の予言者としてより高いレベルで人間社会をとらえなおそうとする努力、その挫折そしてキリストによる救いへとたどられるこの作品は、思想的移り変わりの相互的緊密性をあまり持たないままほおりに出されてしまった。その後 *the Four Zoas* を大きな土台にして、Blake の靈感のほとばしりは、宗教と芸術が緊密に結びついた大作 *Milton* と *Jerusalem* を生み出していくのである。

注

原詩の引用はすべて、*The Complete Writings of William Blake*, ed. Geoffrey Keynes, Oxford U. P. 1969, の *THE FOUR ZOAS* (pp. 263-382) により、それぞれ Night 番号で示してある。

- (1) “Lambeth Seven Books”: *Visions of the Daughters of Albion, America : a Prophecy, Europe : a Prophecy, The Book of Urizen, The Book of Los, The Book of Ahania, The Songs of Los.*
- (2) cf. Mona Wilson, *The Life of William Blake* (Oxford Paperbacks), chapter III, “Revolutionary and Mystic”.
- (3) a Letter to W.Blake Septemter 1800.
- (4) a Letter to T.Butts, 2 October 1800.
- (5) 寿岳文章訳『ブレイク詩集』(弥生書房)解説参照.
- (6) J.Beer, *Blake's Humanism*, p. 189.
- (7) *A Song of Liberty* (1793), Number 7.
- (8) プラトン、『国家』(中央公論社)参照.
- (9) cf. N.Frye, *The Stubborn Structure*, pp. 183-190.
- (10) G. E. Bently Jr., *William Blake, Vala or the Four Zoas*, (Oxford, at the Clarendon Press, 1963), Introduction p. xvii.
- (11) first Title は、*Vala or the Death and Judgement of the Ancient Man, a Dream of Nine Nights* で、後 *The Four Zoas, the torment of Love & Jealousy in the Death and Judgement of Albion the Ancient Man* と書き改められた。
- (12) この「エペソ人への手紙」からの引用は、ギリシャ語で書かれ、Blake が Hayley からギリシャ語を学んだのは1800年以後である。
- (13) 土屋繁子、『ヴィジョンのひずみ—*Four Zoas* をめぐって』 *Critica*.